

日本漢文資料 樂書篇

雅樂資料集

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

《論考篇》

緒言	磯 水絵
藤原宗輔年譜考	小川剛生
『山槐記』に見る音楽	磯 水絵
『山槐記』音楽記事年表 附簡易索引	
『玉葉』にみる九条兼実の琵琶——『文机談』御師争い逸話の史実考証を通じて——	櫻井利佳
『玉葉』音楽記事年表	
『台記』音楽記事年表	廣瀬千晃
源俊房の音楽活動について	芝田泰典
『水左記』音楽記事年表	
『胡琴教録』真名本について	神田邦彦
附載『胡琴教録』真名本 翻刻・校異	
『胡琴教録』諸本解題目録稿	
『胡琴教録』研究文献目録	
東儀鉄笛著『楽道偉人伝』翻刻・	滝沢友子・下浅千穂・芝田泰典
『楽道偉人伝』人名索引	

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム中世日本漢文班

2006 年 3 月

雅楽資料集

二松学舎大学 二十一世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

《論考篇》 目次

緒言	磯 水絵	一
藤原宗輔年譜考	小川剛生	五
『山槐記』に見る音楽	磯 水絵	三三
『山槐記』音楽記事年表 附簡易索引	櫻井利佳	三四
『玉葉』にみる九条兼実の琵琶——『文机談』御師争い逸話の史実考証を通じて——	廣瀬千晃	三九
『玉葉』音楽記事年表	芝田泰典	三〇八
『台記』音楽記事年表	源俊房の音楽活動について	三〇六
源俊房の音楽活動について	『水左記』音楽記事年表	三〇六
『水左記』音楽記事年表	『胡琴教録』真名本について	三〇
『胡琴教録』真名本について	附載 『胡琴教録』真名本 翻刻・校異	三五
附載 『胡琴教録』真名本 翻刻・校異	『胡琴教録』諸本解題目録 稿	三〇
『胡琴教録』諸本解題目録 稿	『胡琴教録』研究文献目録	三二
『胡琴教録』研究文献目録	東儀鉄笛著 『楽道偉人伝』 翻刻	三〇四
東儀鉄笛著 『楽道偉人伝』 翻刻	滝沢友子・下浅千穂・芝田泰典	三〇四
『楽道偉人伝』 人名索引	『楽道偉人伝』 人名索引	三六一

緒言

ここに呈示する三冊は、二松學舎大學二十一世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」、中世日本漢文班、「二年目の成果である。中世日本漢文班の一の特質は、日本漢文資料をとおして我が国の礼楽を研究するところにある、この三冊はその礼楽の内容研究に先駆けて、研究の基盤を固めるべく企画されたものである。また、本COEプログラムには、「1 データベースの構築」「2 海外との連携と研究者ネットワークの確立」「3 若手研究者や文献専門技能者の養成」「4 漢文教育の新たな展開」という四本の柱が中心に据えられているが、この三冊が、その第三番目の柱に大きく関わるものであることは言うを俟たない。《資料篇》に収録した上野学園日本音楽資料室架蔵史料類の書誌データは、本学内外の大学院生、若手研究者の調査を元にしたものであり、そのデータを、「声明資料集」については中世漢文班担当である田中幸江が、「雅楽資料集」については、上野学園日本音楽資料室非常勤研究員の神田邦彦（本学大学院前期課程修了者）がまとめた。なお、その書誌データ採取の際には、上野学園日本音楽資料室長福島和夫教授に多大なるご指導を賜った。複写データで書誌を採らせる無謀も少なくない昨今にあつて、貴重な史料類にじかに触れさせていただいた者たちの幸運は言葉に尽くせない。彼らの指先がその紙質をいつまでも覚えておくことを願うのみである。

第二冊、第三冊に収録させていただいた上野学園日本音楽資料室の雅楽関係蔵書目録は、その一部を展覧目録に紹介されることはあつても、これまで全容を明らかにされてこなかった。今回、別置の「稲葉与八旧蔵楽書類」と「波多野太郎収集明清楽史料」を除く、そのほとんどをお示しできたことは喜びにたえない。そうして、この二つの別置文庫の目録も遠からずお示しできることを付け加えておく。公開をお許しください。たださつた同資料室に深く感謝するものである。この上は、この目録公開によってさらなる史料の活用が促され、楽書の研究が進展することを祈るばかりである。

さて、我が国の礼楽は、古代に中国から、あるいは朝鮮半島を経由してもたらされた雅楽によって大きく変貌した。その雅楽がもたらされた折の状況は、おそらく文字がもたらされた時に似ていて、国際社会に伍していくために整備を急がれた我が国の礼楽は、その輸入によって急激な進展を遂げ、結果的には在来礼楽を大きく変容させたものと推察される。したがって、当時の神楽や東遊、久米舞といったいわゆる国風歌舞（くにぶりのうたまい）も、古代のそのままと見ることはむずかしい。また一方において、大陸に育った雅楽も、我が国においては儒教的なものから一層仏教的なものと融合して、これまた日本化していった。その軌跡は慎重に辿られなくてはならないし、転換点を見極められなければならない。

十二世紀における我が国の礼楽は、そうした軌跡の後に位置している。したがって、その礼楽の究明には、歌舞の実態追求もさることながら、奏楽の場の研究、換言すると、有職故実の研究が先んじて行われなければならないと考える。そこで、その有職故実を研究するに当たって重んじられるべきは、まず、一次史料である宮廷人の日次（ひなみ）記であろう。いわゆる、『西宮記』『北山抄』『江家次第』といった有職故実書類も、基本にはそうした日次記を置く。現在、我々が問題にしているのは、主に十二世紀初頭に成立した『江家次第』以降、十三世紀初頭に成立した『禁秘抄』以前のこと当たる。その間のことについては後掲の拙稿のうちに述べたから、そちらを参照されたいが、因みに、昨年度まとめた『藤原通憲資料集』もその枠内にあった。重ねて言うが、古代の宮廷文化は、平安時代四百年を通じて緩慢なる変容を見せつつ存続してきた。しかし、一千八百八十年代に鎌倉幕府が開かれ武家政権が樹立すると、政治の中心は京都と鎌倉に二極化し、それまでの宮廷文化は、経済的に疲弊した宮廷貴族たちに維持されることが難しくなり、次第に形骸化していくことになる。その転換点を見極めるためにも十二世紀の文化活動を理解しなければ、そして、そこを確認した上で時代を降りていかなければと、これらを構想したのである。

さて、第一冊「雅楽資料集」《論考篇》には、日本漢文史料の一角を占める男性貴族日記より、『中右記』『山槐記』『台記』『水左記』『玉葉』等を取り上げて、稿者それぞれの方法で音楽記事を抽出し、それをあるいは年表化し、あるいは考察することをした。特に小川剛生氏の「藤原宗輔年譜考」は、氏の学生時代のそのの評判をかねて聞いていて、捨て措くに忍びなく、曲げて掲載をお願いした。漢文で著された日記類は、近年読めない者が増え、顧みられることも少なくなってきた。それを危惧してか、一方ではその訓読書の刊行が盛んになってきたが、今度は訓読されない日記類がますます顧みられなくなり、引用に偏りが出てくるという弊害も生じている。また、『大日本古記録』『史料纂集』

等、見出し、傍注、索引付の読みやすい後続刊行物に押されて、『史料大成』に収録された日記類は分が悪くなっている現状である。しかし、院政期を理解するにはそれも言っていられない。今後は本資料集に間に合わなかった『長秋記』『兵範記』等の日記類をさらに渉猟し、音楽用語を蒐集して、且つは『日本国語大辞典』他の辞書、辞典類に用語例を提供、正確な解説を促していきたいと考えている。とまれ、ここに収載した日記類の情報から、当時の礼楽場面の実際、貴族の生活に密着した詩歌管絃の有り様をご理解いただければ幸いである。なお、『論考篇』には未だ「論考」というには足りないものも存在する。あえて言うならば、縦書き、横書きという書き様の違い、編集の都合によって『論考篇』に配されたに過ぎないものもあるが、そこは試行集ということでお許し願いたい。

先に文字の持ち出ししたが、平安後期に到ると、相変わらず漢字を使用していた男性の文章にも、いつしか仮名の要素が加わってくる。それはこの後、鴨長明の『方丈記』や『平家物語』といった和漢混淆の名文のうちに結実していくことになるが、楽書における和漢混淆文の多くは、男性の手になるとは言い条、地下（じげ）の楽人によって物されており、名文には程遠くわかりにくい。自ずとその教養が問題になってくる。同じく楽書として括られていても、貞保親王や妙音院藤原師長といった貴顕の作とは同列に扱えない。したがって、そうした中に存在する真字本『胡琴教録』は、楽人の識字、用字という方面から見ても、はなはだ興味深い問題を我々に投げ掛けてくる。一方に存在する仮名本のそれとの前後関係は、如何なものであろうか。本冊に初めてその真字本の翻刻を載せた。

また、東儀鉄笛の『楽道偉人伝』の翻刻は以前にも試みられているが、研究者の目に触れる機会が非常に少なく、しかも、一般的な人名辞典類には地下楽人が取り上げられない現状を鑑みて、あえてこれを収載した。本資料集の編纂目的の一は、楽書研究に資する便覧作成にあった。したがって、そこに発想されるものについては、出来得るかぎり掲載しようと試みたのである。第二冊「雅楽資料集」《資料篇》の正・続群書類従（管絃部）の事項索引も稿本であるが、それでも、今後の楽書研究、音楽用語の研究に資することには疑いないということ載せた。来年度から中世日本漢文班の楽書部は『教訓抄』の研究に入る予定であるが、楽書の多くは、説話文学と同様に同話類話を有し、互いに影響しあっている。しかも楽曲に関わる逸話の多くは大陸に源を発している。それらの関係を調査するためにも、索引の充実は急務であった。虫のよいことではあるが、批判は甘受して、且つは使用者からの御教示を仰ぎたい。

最後に、第三冊「声明資料集」であるが、中世日本漢文班に協力者として集結してくださった、福島和夫、新井弘順、ニールス・ギユルベ

ルク、高橋秀城の四氏は、当代において講式資料類を實見、精査しておられる点において、いずれも人後に落ちない方々であり、その研究成果は大いに期待されたが、はたして、それを裏切らない一冊となった。上野学園日本音楽資料室架蔵の講式史料類は一宗に偏することない、網羅性を特徴とするが、それらをとおして作成された講式や伽陀の索引類によって、古典文学作品中に引用された法文や偈の出典研究の飛躍的伸張が期待される。

当初、上野学園日本音楽資料室架蔵史料の目録作成を目指して始められたこの書の企画は、次第に膨らんで、ここに呈示したに倍する内容の楽書便覧が目論見られたが、結局はこの三冊に落ち着いた。それでも、よくここまで到達したと思う。これは、ひとえに田中幸江、神田邦彦両編集長の功績であり、二人を支えた大学院生、若手研究者の協力の賜物である。一人一人の名は巻末に譲るが、深く感謝の意を表したい。

そうして最後に、安易な妥協をお許しにならず彼らを常に高みを目指すようお導きくださった、上野学園日本音楽資料室室長福島和夫教授に、重ねて御礼を申し上げます。

中世日本漢文班主任 磯 水絵

平成十八年三月吉日